研究ノート

「食習調査」成果についての一考察

竹内 由紀子

1　はじめに

昨年9月に本学民俗学研究所より、『日本の食文化――昭和初期・全国食事習俗の記録――』が刊行された[1)]。本書は、昭和16年から17年にかけて大政翼賛会の委託により民間伝承の会の呼びかけで行なわれた「食習調査」の調査結果を活字化したものである。本書には全国58箇所で行われた調査のデータが収録されている。この調査は全て、民間伝承の会から編集発行された『食習採集手帖』を基にして行なわれており、当時の食事習俗を全国規模で記した貴重な資料であるといえよう。

本稿は「食習調査」成果に関して、有効な分析方法を探る前段階としてその資料的性格を検討する。そのために、現在の学の水準に照らして「食習調査」のもつ民俗調査としての問題点を指摘することにもなろう。しかし、それは「食習調査」の価値を貶めることを意図するものではない。資料としての性格を検討せずに、安易にデータを採用するのは危険なことである。

今回の考察により、「食習調査」は他の共同調査に比べ特殊な状況下で行なわれたと想到された。「食習調査」の為され方、およびその成果を考察し、そこから抽出される問題点を一般化して今後の調査・研究へ照射させることとしたい。

2　「食習調査」について[2)]

(1)　「食習調査」の沿革

「食習調査」は、学問上の食についての関心の高まりと、時代的な要請によって行なわれたといえるだろう。民俗学における食研究の歴史を眺めると、それまでどちらかというと好事家的な論考が多かったが、昭和7年柳田國男の「食物と心臓」[3)] によって食研究の意義が説かれ、それ以降、昭和11年には『旅と伝説』誌上で「食制研究」という特集が組まれる[4)]など食に対して関心が向けられるようになった。柳田はこの頃、つぎつぎと食に関する論考を著し、昭和15年には『食物と心臓』[5)] が出版された。その動きは他の研究者にも影響を与え、『民間伝承』誌上でも多くの食に関する記事が投稿されるようになる。このように当時は食研究の意義が認識され、関心が高まっていた時期であったといえる。さらに、当時は戦時体制下にあり、伝統的な食生活が変貌を余儀なくされることが予想され、そうした事態に陥る前に食習俗の記録をしておかねばという学問的な危機感があったと考えられる。また、迫り来る食糧難に向けて、過去の質素な食生活の中から対策を見出そうという実利的な思惑もあった[6)]。

こうした中で『民間伝承』6巻8号（昭和16年5月）では「研究の栞・食習採集要項」として『食習採集手帖』の要項目次が掲載され、当の手帖は昭和16年6月に刊行された。「食習調査」は大政翼賛会からの正式委託を受け、『民間伝承』6巻12号誌上において調査への参加募集が行なわれる。大藤時彦によればこの調査は、橋浦泰雄が「食習調査」の企画を大政翼賛会に持ち込み、それにより民間伝承の会が委託を受けるという経緯で実現されたという[7)]。

(2)　『食習採集手帖』について

『食習採集手帖』は、「食習調査」に先立ついわゆる「山村調査」に使用された『郷土生活研究採集手帖』以来の体裁、すなわち100の質問項目からなる書き込み式の手帖である。大きさは菊半截で、見開き左ページ右端に項

目番号と質問項目が印刷されており、調査者はその余白に調査データを書き込んでゆくようになってる（『昔話採集手帖』・『採集手帖・沿海地方用』も同様）。質問は、

1　村一般の日常の主食量としては、どんな種類の穀物を用いますか。

というように発問され、ほとんどの質問にはそれを補足・追加する枝問が

米、麦、栗、稗、黍などを混ぜ合わせますか。米のクダキ、シイナなども用いますか。混ぜ合わせによって名が違いますか。

というように書き添えられている。質問項目は、番号1～100まで順に並べられおり、その並べられた順番は意味を持っている。田中宣一の整理によれば、その構成は以下のようである（数字は項目番号）[8]。

Ⅰ　日常の食事習俗

(1)　主食物　1～16　　(2)　副食物　17～31

(3)　特殊食物　32・33　　(4)　食制　50～54

(5)　食具　50～54

Ⅱ　ハレ（非日常）の食事習俗

(1)　供え物　55～57　　(2)　ハレの日の食事　58～67

(3)　共同飲食　68～78　　(4)　食物の霊力　79～84

(5)　一番の御馳走　85・86　　(6)　嗜好品　87～94

Ⅲ　飢饉時の食事習俗　95～98

Ⅳ　日常食事概要一覧表　99

Ⅴ　主要食料品一人一ヵ年の使用料概算表　100

(3)　「食習調査」の性格

『食習採集手帖』が『郷土生活研究採集手帖』に準じて作られ、そうした手帖を基に日本各地で一斉に調査が行なわれたことは既に述べた。しかし、この「食習調査」は「山村調査」とはだいぶ趣を異にしている。

「山村調査」は郷土生活研究所が学術振興会の援助を受け、昭和9年5月から12年4月の間、52箇所の調査地で16名が参加して行なわれたものである。調査地の選定から、調査項目の作成まで柳田自らが行なった。どのよ

うな基準であったにせよ、明確な意図をもって選定された調査地群であるといえよう[9)]。

「山村調査」に参加したメンバーは、郷土生活研究会すなわち木曜会のメンバーで、柳田の周辺で民俗学に関わっていた中央の研究者達が主体であった[10)]。「食習調査」は昭和16年という戦時体制下の事情から、「山村調査」のように中央から研究者を派遣することができず、地方在住の研究者に依頼したり、『民間伝承』誌上での公募に応じた者達がこれを行なった[11)]。それゆえ調査地も民間伝承の会が指定するのではなく、これらの人々の居住地あるいはその近郷に限られた。

「食習調査」の調査地は東日本が多く、西日本ではあまり為されていない。鹿児島・宮崎・大分・佐賀、山口・広島・兵庫・大阪、愛媛・高知で未調査である。また、関東地方でも千葉・茨城・神奈川・埼玉、いずれも調査地から外れている。こうした調査地の偏在は、以上のような事情から生じている。

また、「山村調査」の場合、参加者たちは手帖の質問項目について柳田を囲んで勉強会を行ない、ある程度の調査についての意志統一が行なわれていたのに比べ[12)]、「食習調査」では調査者の共通理解の機会はなく、唯一『食習採集手帖』だけが共通するものであった。質問項目の解釈や意味付けは各調査者に委ねられた。これは、「食習調査」を「山村調査」・「漁村調査」と同様の共同調査としてとらえることが危険であることを示している。

『食習採集手帖』の質問項目には柳田はタッチせず、橋浦泰雄が中心となって作成されたが、作成後、柳田からの修正の指示はなかったという[13)]。柳田自身は作成過程に直接関わっていないものの、質問項目は昭和12年に『民間伝承』に掲載された山口貞夫「食物語彙採集要項」[14)]（柳田のカードを元にして山口が整理）や柳田のそれまでの著作を参考にして作られたと思われるので、柳田の意図と遠くないところで作成されたものといえよう。ただし、山口の「食物語彙採集要項」や『日本民俗学入門』[15)] あるいは『食物習俗語彙』[16)] の構成と違って、『食習採集手帖』は全体をハレとケに分けて扱っていることに注意したい。この区分の問題点については次節で述べることとする。

3　「食習調査」にみられる問題点

前節で、「食習調査」が当時の民俗学において必ずしもベストの状況で行なわれたものではないことを述べた。「食習調査」は、民間伝承の会の企画として成功を収めたといえるだろうか。「食習調査」を全体としてみた場合、私には若干の不満が残る。調査地により記述の量や質に差があり、質問項目によっても回答が十分得られているとはいいがたいものもある。調査地ごとに1～100までの回答を読んで、あるいは58箇所全てを通して読んで、どれだけ食生活が見えてくるのか疑問もある。では、何故そうなのか以下に考えてみることにしたい。

(1)　調査地の地域概況との問題

食生活が見えにくい理由の第一に挙げられるのが、前提として示されるべき知識として地域概況が表されていないことである。「山村調査」・「海村調査」では、調査結果が質問項目ごとに分類概括された『山村生活の研究』・『海村生活の研究』として発表されたが、項目ごとに分割することについて山口麻太郎[17]によって批判された。山口の批判は研究対象のとらえ方そのものに対する問題提起であったが、資料が分類概括される問題点だけに限っていえば、分解以前の手帖は断片的であったとしても、地域の特性、あるいは各項目の資料と資料の組み合わさりに関して読むことができる。それは、これら調査が「村」全体を調査対象としたからであるが、「食習調査」は、調査自体が食生活という生活の一側面だけを扱おうというものであり、その食事習俗の背景となっている調査地の姿は手帖からは抜け落ちてしまっている。同様のものとして『昔話採集手帖』があるが、昔話研究は資料を分類し、類型化する方法が主流であり、背景としての調査地を抜きにしても研究は可能である。しかし、「食習調査」はどうであろうか。背景となる調査地についての知識を抜きにして食生活の全体像が見えてくるのだろうか。

食生活は、それのみでは存在しえない。その地域の生態学的条件・経済的条件・社会生活・信仰生活などと密接に関連しあっている。『食習採集手帖』

にそうした記述のないことが、この資料のウィークポイントとなっていることは否めないであろう。

なかには、手帖の最終ページの白紙を利用して、地域概況を記している者もいる。これらの人々は『民間伝承』の常連投稿者であり、たとえ地方在住者であっても、中央の研究者と近い位置にいた者達であったことが注目される[18)]。

(2) 質問項目の問題

調査地ごとに記述の質や量に差があったことは既に述べた。例えば、

18 畑作野菜としてはどんな種類のものを用いますか。そのうち主要なものの使用量をもお知らせ下さい。

という質問に対し、

大根・人参・牛蒡・玉葱・わけぎ・甘藷・きゅうり等。

とだけ答えている者もあれば（東京府島津島村）、45種類の畑作野菜を挙げている者もある（岡山県川上郡平川村）。前者の調査地では食品の種類が少ないのであろうか。確かにそれも考えられる。しかし、話者がそれだけしか答えなかったという可能性も高いであろう。

食についての調査の難しさについては、江馬美枝子が「困ってゐること」と題して当時の『民間伝承』に寄稿している[19)]。例えば、稗食のようなつましい日常の食生活について語ることは「村の恥」と考えて、話者が調査者に対して相当親しい気持ちを持ってくれてからでないと本当の話をしてくれないことなどを江馬は述べている。手帖に書いてある文言のみを話者に発しただけでは、十分な回答を得られないであろう。厚い記述を物した調査者は、言葉を変え、角度を変えて話者に尋ねたと想像される。

ところが、『郷土生活研究採集手帖』以来、『食習集採集手帖』の「採集上の注意」にも、

五、疑問があっても疑問のまま書き留めて、自分の解釈を加へないで下さい。

とある。これを文字通りに受け取った調査者がいたとすれば、話者の回答が

十分だと思えなくても手帖に印刷された質問項目以上のことを聴く必要を感じることはないだろう。

このような状況では、誰が「調査者」であるのだろうか。福田アジオは、このような『採集手帖』の性格から当時の民俗学の状況を、柳田および中央の研究者によって提出されたものが研究課題であり、研究者自身の主体性は不問にされていたと指摘している[20)]。「食習調査」の報告のうち記述の少ないものには、こうした事情も関わっていたのではないだろうか。きわめて日常的な事象に属し、言語として表現しにくい食についての調査を、主体性を問われない調査者が固定された質問を繰り返すことによって招かれた結果、といえるような報告も見受けられる。

概ね現在の民俗学では、調査項目は単なる目安であり、依存しなければしないほど理想的な調査であるとされている[21)]。「山村調査」当時の調査でも、中央の研究者の間ではこうした調査がなされていたようである[22)]。しかし、それは研究者間の情報交換が盛んで、かつその質問項目の意図を熟知していた、恵まれた研究者であればこそできたことであろう。「山村調査」のような勉強会が行なわれず、調査者としての主体性が問われる機会に恵まれなかった地方在住の研究者に頼った「食習調査」は、「山村調査」・「海村調査」以上に質問項目に呪縛されていたと考えられる。

こうした呪縛が問題になるのは、一つには、質問項目自体に作成者の知識が先入観として作用しているからである。そのような条件で作られた調査項目に固定された質問を繰り返すことは、話者の語る内容にあらかじめ枠を与えることとなりはしないか。こうした力の影響下で切り取られた部分部分を寄せて合わせて、話者の実際に生きて生活している姿が見えてくるだろうか。

先に挙げた、調査項目の構成をみていただきたい。「食習調査」質問項目には、既に分類枠組みが用意されている。「採集上の注意」には、

一、本手帖の要項は大体に日常時と晴の場合との二大別とし、それに飢饉時の場合をつけ加へました。ただし諸項に関係重複する資料のある場合は、採集者が勝手に取捨することなくそのまま関係各項へ採録し

てください。

二、食物は専ら食料と食品に二種別し、それぞれ項を別にしました。即ち食料とは未だ調理せざる以前の原料をさし、食品とは調理してただちに食用する状態に製したもののことです。これにも若干区分し難い場合を生じるかも知れませんが、右の要点に注意して混同せぬようにして下さい。

と書かれている。ハレとケという二大区分、および食料と食品という区別が強調されている。もちろん、調査者といえどもまったくの白紙の状態で話者に接することなど不可能である。調査目的に沿った枠組みは必要であろう。しかし、この注意として挙げられている区分が、調査項目自体にどうしても必要な分類であったのだろうか。

確かにハレとケは民俗学において重要な区分である。しかし、「採集上の注意」執筆者も認識しているように、実際の人々の生活が明瞭にハレとケに区分けされているわけではない。また、同じ物をハレとケどちらに振り分けるかという境界線を引く位置は、地域によっても異なっているだろう[23)]。また、「食物名彙」や『食物習俗語彙』、『日本民俗学入門』が食料・食品・食具・食制の4区分を用いて、ハレ・ケについてそれぞれの表出する場所で扱うようにしているのは、ハレ・ケの区分を大区分として適用することが必ずしも都合のいいことではないと感じていたからではないだろうか。

また、食料と食品について「採集上の注意」に従って分類しようとしても混乱が生じる。これは、この「採集上の注意」に「調理」という語に対する配慮が不足しているからである。この記述では、食料（原料）と食品（調理済み）の間に存在するもの――例えば製粉した粉や精白した穀類、あるいは製麺した麺類など――が表現の上から抜け落ちている。「ただちに食用する状態に製したもの」という表現を取れば、食料の方に入れられるべきなのだろうが、これらは「原料」そのものでもない。質問項目の文章をみると、粉や精白した穀類は「食料」のようだが、なぜ原料としての食料に対して為される製粉・精白の過程を「調理」と区別するのか、「調理」と区別するなら何といえばよいのか。麺類について考えてみよう。項目作成者は麺類を「食

品」の方に入れているようである。原料である穀物を製粉した後、麺を打つ。麺を打つ過程を「調理」としているのは理解できる。しかし、仕上がった麺は、精白した穀類を炊いたり煮たりするのと同様、さらに「調理」の過程を経なければ「ただちに食用する状態に製し」たとはいえない。確かに、執筆者のいうようにこれは「区別し難い」のである。

以上のように質問項目をハレとケ、あるいは食料と食品に分ける意味がどれだけあるのだろうか。それは、調査後に資料を分類する際の便宜でしかないのではないだろうか。逆に大切なのは、質問項目をハレとケ、食料と食品に区分することではなく、話者から得られた資料を元に、話者にとって何がハレで何がケなのが、食料と食品をどう区分しているか分析することなのではないだろうか。

質問項目の疑問な点をいくつか挙げてみよう。

代用食とはそもそも何の「代用」であるのか。米の飯がハレの機会に限られるような地域では、話者のレベルで「代用食」という言葉は在ったのだろうか。この語を使用していない土地があったとすれば、たぶん、話者と調査者が四苦八苦して「解釈」を加えて、これなら代用食といえるだろうというものを探して、書き込んだのではないだろうか。事実、石川県石川郡館畑村の報告には、「混食・代用食等というが地方において機械設備の不足とあいまって認識は十分ではない」と述べられている[24)]。

嗜好品（酒・茶・菓子・果物・煙草）をハレの食に含めているが、その基準は何なのだろうか。鮨や地方特有の食物・料理をケに含めている基準から考えて理解に苦しむ。果物を「嗜好品」に入れていること自体、少なくとも私にはすんなり了解できない。

使用量についての質問がなされているのは、畑作野菜・野生植物・魚介・獣肉・塩・砂糖・酒・茶・果物である。しかし、何故これらについて尋ねて他は必要ないのか明瞭でない。作成者の価値観が働いていると思われる。

以上にみられるように、作成者の知識や価値観によって作られた質問項目に縛られた調査を行なえば、話者の持つ知識が調査項目作成者の知識体系の内に囲い込まれてしまうのではないだろうか。

(3) 自己の知識の表面化についての問題

「食習調査」資料に触れて、最初に気になったのが「××、○○等」という記述や、「特別なものはない」とか「一般と同じ」という記述が多いことであった（多いものは、1ページに11個も「等」が出てきた）。前者については「等」の先にあるものが知りたいと思うし、後者については、特別であるとか一般的であるという基準は何によっているのか。

調査者が、自身の郷土を調査するということは、柳田らによって積極的に肯定されてきた[25]。郷土の者が一番よくその土地を知っているということには間違いないだろう。しかし、よく知っているということが調査の妨げとなる場合もある。それというのは、その土地に住む者にとってそこでの生活は自明のものになってしまい、あえて語ることに必要性を感じられらくなってしまうからである。

これらは、当時の調査者達の間に、より古風を残した民俗、めずらしい民俗の採集を指向していた傾向があったことにもよる。付記の文章のなかにそういった指向の表れた表現が散見する。例えば、「比較的文化も遅れている感があるが、その代わり古いいろいろなものを伝えており、民俗上の探求者には尊い宝庫の感もある」[26]。あるいは、「とくに珍奇なものもなく、平凡であって興趣あるものはない。ことに一般人の食物に対する習俗に注意するものは少なく、今日の採集は期待するものに反する」[27]。「近年急激に旧慣が打破されて、見るべきものがない」[28] といった具合である。

「ふつう」とか「一般的」とか記述した者の基準が、客観的に一般的なものであったかどうかは疑問である。また、たとえそうであったとしても、あたりまえのことを記述することも重要なことではないか。その調査を記録している「今」も、必ず「過去」になるからである。この「食習調査」についても、調査者に自身が時間の流れの中に身を置いているということに対する意識が希薄であったと思われる。「食習調査」調査者にとっての「ふつう」や「一般的」な部分は、往々にして書かれないままになっていた。50年後の「今」にとってその常識は共有不可能であるにも関わらず……。このように、自分が気にも止めずにいることを表面化させて記述するというのは、実

は容易なことではない。人々にとって自分の立っている地点がブランクとなる。だからこそ、多くの報告が「等」「ふつう」に収斂されるのである。

調査する者が自己の意識を常識という保護色から引き剥がし、話者と共有するブランクを顕在化させることの難しさについて、大貫恵美子はこう語っている[29)]。

> ……われわれは自らの習慣や行動を自明のものと受けとることにより、それらに内在する構造やパターンといったものがかえって見えにくくなるのである。人類学者として、われわれは観察の中から構造、パターンを抽象化する必要に迫られているが。レヴィ＝ストロースが指摘するように、人々はめったに自らが形作っている現実について自覚することはないのであり、時として意識的にモデルをもっているとしても、多くは不正確でむしろ構造の究明の妨げとなる場合が多い……。

自文化を研究する者は、調査者自身も自明のものとしている調査すべき問題点を、自己を相対化することによって自明性から引き剥がし、問題を問題として把握するという課題を負わされている。しかし、これは生易しいことではない。「食習調査」で「一般的」とか「ふつう」と記述されたものは、調査者が話者同様に自己の知識の自明性にからめととられたことにより、話者が語らなかった自明な事柄を表出させる機会を失った結果である。

また、「採集上の注意」に、方言はなるべく取り入れるようにとある。方言を多く取り入れた報告も多いのだが、その方言の意味について何の注釈もないものもある。毎日自分の接している言葉であるために、説明の必要な言葉であると気付かなかった者もいることだろう。自文化の研究を行なう際、言語を同じくしているという、こうした安心感も意外な落し穴になってしまうのではないだろうか。

4　「食習調査」資料の可能性

以上、「食習調査」の問題点を列挙してみた。ここで、この調査を叩き台にして食に関する調査の難しさを再確認することができた。食に関わる諸事

象を、その存在する文脈の中でとらえていきたいと考えるならば、ここに挙げたような問題点を考慮していかねばならない。

次に、「食習調査」資料によって何ができるか考えてみよう。もともと『食習採集手帖』は何を目的として作られたのか。『食習採集手帖』は『郷土生活研究採集手帖』と同じく、一冊の手帖をバラバラにしてそれぞれの項目ごとに分類することを目的とした体裁をなしている。項目一つ一つの全国的な共通性や地域的差異を見てゆくのに便利な作りになっており、重出立証法を用いることを前提として手帖が作られている。そのゆえに、地域の概況や項目と項目の間の行間といった文脈は、なくてもさしつかえないのである。

このように、その調査地の生活から切り離された形になっている「食習調査」資料から明確に取り出せるのは、言葉や或る習俗の有無などについてであり、そこから語彙の抽出、習俗の分布の研究などを行なう目的をもっていたと推察される。これまでにも『食習手帖』は、昭和49年発行の『食物習俗語彙』[30]の引用文献として用いられ、また、資料の一部は瀬川清子[31]などによって利用されている。

何を食べていたかとか、どういう習俗が存在するかという「事柄」を知ろうというのではなく、そうした営みを人々が自己へどう関わらせていたかということを考えていきたい。先に、「食習調査」資料には、報告により記述の密度に差があることを述べた。しかし、記述の厚いものだけピックアップして使用したり、不足している情報を他の報告書と突き合せることは当然の利用法であり、そうした方法以外に何ができるか、今後の課題である。

ただ、既にみてきたように、実際にそこで行なわれていた生活そのもののスケッチとしてみるには少々問題がある。しかし、今まで挙げた問題点をふまえて、この資料に立ち戻ったとき、別の見方が可能になるだろう。

前節で述べたように、自己のあたりまえの生活について言葉にするのは簡単なことではない。問われて、すらすらと口をついて言葉が出る事象は、そのとき既に意識化――あるいは言語化――されていたといえよう。記述の厚い薄いは話者の関心の度合いを示している。質問に対する応えが定式化している項目は、話者はその程度にしかその問題について関心をもっていなかっ

た、と理解することができる。そうした観点で資料をみれば、話者にとって何が大切であったのかが表れてくるのではないか。

こうした見方に立つことにより、定式化していて記述が薄いなどの問題を残した資料も、他と同様の資料的な価値を見出すことができるのである。

＜註＞

1） 成城大学民俗学研究所：1990b

2） 「食習調査」の経緯に関する事実関係については、田中宣一：1990 も同様の追跡を行なっている。

3） 柳田國男　1932「食物と心臓」『信濃教育』543 号（定本 14 所収）

4） 『旅と伝説』9 巻 1 号（1936）

5） 柳田國男　1940『食物と心臓』創元社（定本 14 所収）

6） 大藤時彦：1990 によれば、橋浦は当初からこうした意図ももっていた。そのことは、橋浦：1944 にも表れている。また、大政翼賛会側のこうした食糧政策に対する取り組みについては、田中：1990 に詳しい。

7） 大藤：前掲書

8） 田中：前掲書

田中は、さらに下位の構成をも整理しているが、ここでは煩雑になるのを避けるため割愛した。

9） 成城大学民俗学研究所：1990a；pp.343－345

10） 山口貞夫、杉浦健一、大間知篤三、佐々木彦一郎、倉田一郎、守随一、小寺兼吉、大藤時彦、瀬川清子、桜田勝徳、最上孝敬など。

11） 調査者は 52 名、地元の教員などが多く県庁職員なども参加した（資料提供：成城大学民俗学研究所）。

12） 成城大学民俗学研究所：1990a；pp.341－342

13） 大藤：前掲書

14） 2 巻 9・10 号

15） 柳田國男／関敬吾：1982

16)　柳田：1974

17)　山口麻太郎：1939

山口は、項目ごとに分散させたことに対して「各個の郷土生活事象は生活の基地を離れて研究所の試験管に並べられて居る」と批判し、「地域民俗学」を提唱した。当時の学史的流れは、福田アジオ：1984 にまとめられている。

18)　本田安次、小玉暁村、和田文夫、渡辺行一、伊藤正之助、山口麻太郎など。

19)　江馬美枝子：1941

20)　福田：前掲書；p.238、248 等

21)　福田：前掲書：p.243

22)　成城大学民俗学研究所：1990a；pp.345－346

「山村調査」を振り返る座談会で関敬吾は、橋浦泰雄や桜田勝徳の調査の仕方について回顧している。

23)　焼き米やうどんなどにその例が顕著である。

24)　成城大学民俗学研究所：1990b；p.229

25)　柳田國男：1934；p.7

26)　成城大学民俗学研究所：1990b；p.66

27)　成城大学民俗学研究所：1990b；p.113

28)　成城大学民俗学研究所：1990b；p.213

29)　大貫恵美子：1985；p.22

人類学者である大貫は、アメリカに 25 年間生活した経験と日本人として生まれ育った両面を生かし、現代日本の都市における健康維持体系が根深く日本文化によって規定されていることを象徴人類学的視点から分析した。大貫は「序文」において、現地調査をより厳密に行なうための諸問題について検討している。そのひとつとして大貫は、自文化を研究する上でそこから距離をとることの重要性と難しさについて述べている。そのことに自覚的な研究者である大貫でさえ、帰国直後はみえていた日本人の行動様式・思考過程に対する反応が、1 月半も経つと薄れてしまった経験を語っている。自文化から距離をとることは、25 年の距離がたった 1 ヵ月余で埋まってしまうほどに困難なことなのである。

30）　柳田：1974

31）　瀬川清子：1986

［文　献］

江馬美枝子

1941　「困ってゐること」『民間伝承』第5巻8号

橋浦　泰雄

1941　『食習採集手帖』民間伝承の会

1944　「食物の巾と深さ」『民間伝承』第7巻9号

福田アジオ

1984　『民俗学方法序説――柳田國男と民俗学――』弘文堂

1989　「民俗学の方法論」鳥越皓之編『民俗学を学ぶ人のために』世界思想社

井ノ口章次

1977　『民俗学の方法』講談社（初版1970　岩崎美術社）

季刊柳田國男研究編集委員会

1974　「座談会　民俗学の方法を問う」『季刊柳田國男研究』第6号

牧田　　茂

1979　『評伝柳田國男』日本書籍

民間伝承の会

1935－1942　『民間伝承』第1巻1号－第7巻5号

大貫恵美子

1985　『日本人の病気観』岩波書店

大藤　時彦

1990　「はしがき」成城大学民俗学研究所『日本の食文化――昭和初期・全国食事習俗の記録――』岩崎美術社

瀬川　清子

1986　『食生活の歴史』（日本の食文化体系／第1巻）東京書房社（初版1956大日本雄弁会講談社）

成城大学民俗学研究所

1990a　『昭和期山村の民俗変化』名著出版

1990b　『日本の食文化――昭和初期・全国食事習俗の記録――』岩崎美術社

守随　一編

1936　『郷土生活研究採集手帖』民間伝承の会

田中　宣一

1990　「『食習採集手帖』と「食習調査」」成城大学民俗学研究所『日本の食文化――昭和初期・全国食事習俗の記録――』岩崎美術社

和歌森太郎

1976　『日本民俗学講座5　民俗学の方法』朝倉書店

山口麻太郎

1939　「民俗資料と村の生活」『民間伝承』第4巻9号

山口　貞夫

1937　「食物語彙採集要項」『民間伝承』第2巻9・10号

柳田　國男

1933　『山村生活の研究』民間伝承の会

1934　『民間伝承論』共立社（定本25所収）

1937　『採集手帖（沿海地方用）』民間伝承の会

1949　『海村生活の研究』日本民俗学会

1974　『分類食物習俗語彙』（國学院大學日本文化研究所編）角川書店

1990　『柳田國男全集17』筑摩書房

柳田國男／関敬吾

1982　『新版日本民俗学入門』名著出版（初版1942）